
古代の皮革 5. 日本

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

最近(2010.5)、アルメニアの洞窟で発見された牛革製の靴は放射性炭素年代測定により紀元前3500年頃のものであり、世界最古の革靴であると報道された。日本においても、同様に原始時代から毛皮や皮革が利用されていたと考えられる。しかし皮革製品は有機物であるので、その多くは長い年月により分解して消失してしまい、太古の皮革製品は残っていない。古代の皮革製品については、埴輪の装束や出土品、古文書、正倉院に収蔵されている皮革製品等から知ることができる。なお正倉院の皮革製品については、出口が本誌(No.136～147)で詳しく解説しているので、概要のみとする。

2. 皮革の貢納

太古の時代から時の権力者への貢物が行われていたと伝えられるが、日本最古の歴史書といわれる「日本書紀」(720年編纂)によれば、日本の国土が統一された4世紀の大和朝廷時代において、弓弭ゆはず みつぎ たなすえの調と手末の調がそれぞれ男女に課せられていた¹⁾。これらの調は弓弭が弓の両端の弦を掛けるところであり、弓を用いて獲た獣の皮や角を指し、手末が手先の作業で織った布帛ふはくを指す。皮の種類としては、鹿かもしかや羚羊、猪、熊等であった。古代のエジプトやペルシャでも毛皮や皮革は貢納物として扱われた。

その後、調は絹布の類が主要となり、獣皮はしだいに減少して産地の副物そつものとなり、そして産出量が少ない場合には献じなくなった。平安時代初期の宮中の年中行事や制度などの古典法である「延喜式」(905年編纂)によれば、各地の特産物を地方の国が一般農民から買取り、「諸国貢納物」として中央すなわち都に納めた。鹿皮および鹿革(鞣したもの)はほぼ全国から貢納されており、鹿が日本全国に生息していたこと並びに全国で鞣しが行われていたことを示している。鹿皮は信濃(長野)や上総(千葉)、備中(岡山)が多く、一方鹿革は参河(愛知)や武蔵(埼玉)、上野(群馬)が多く、全国合計では年間それぞれ470枚と660枚である。さらに洗革(柔らかい鹿革)は上総、常陸(茨城)、下野(栃木)が多く合計315枚である。牛皮は上野や相模が多く、全国では104枚である。その他に葦鹿あしかや狗いぬ、熊、猪、狸等の皮も若干貢納された。平安京と諸国の国府を結ぶ幹線道路に駅家を置き、馬で官人の旅行や文書の伝達をし、また牛や馬を牧場で飼育して貢納した。これらが死んだ場合、牛皮は皮のまま、馬皮は鞣し革にして貢納した。大宰府からは紫革と緋革あけ、纈革ゆはた、画革え、洗革あらい、白革しら等の種々の革を260枚貢納した。これらの革は鹿革であり、大宰府すなわち九州地方の特産であり、染色技術が発達していたことを示している。

3. 皮革の製造

「日本書紀」によれば、4世紀の頃百済の工人が渡来し、革を裁断する技術を伝え、その後4世紀末より革工が渡来し、革を製造したということである。「延喜式」によれば、牛皮は脱毛・裏打ちし、水に浸してから日光に晒し、踏みほぐして柔らかくし、^{ひきはだ}皺文染革は櫛の皮を採って、麴と塩を混ぜて染める¹⁾。脱毛剤については記述されていないが、湿気のある場所に放置して毛根部を弛緩させ、刃の鈍い銚刀^{せんとう}で擦り取ったと考えられる。正倉院の履底に用いられている牛革には部分的に毛根や毛幹が残っており、現在の石灰漬法とは異なることを示している。櫛の皮は鞣剤の一種でもあるが、ここでは染料として使用されている。麴と塩は発酵による不要成分の除去、生成物の皮への作用すなわち耐久性や柔軟性、風合いの向上のためと考えられる。

鹿皮は毛の除去・裏打ちの後、脳を擦り付けて揉み乾かし、さらに焼き柔らかげて燻し、染色する¹⁾。毛は包丁でまず刈り、その後、銀面（皮の表面）を削り取ったと考えられる。貢納物に馬の脳があるので、これを鞣しに用いたと考えられる。城山遺跡（大阪府 8世紀）や平城京（8世紀後半）から出土した馬の頭蓋骨は後頭部が人工的に割られており、脳を取り出した痕跡がある²⁾。森の宮遺跡（縄文中期から近世の複合）からの一部割られた頭蓋骨が大阪歴史博物館に展示されている。黒い染革は焼鏝で表面を平滑にしてから煙に燻して色付けをした。今日では、脳に含まれるリン脂質や煙に含まれるアルデヒド類に鞣し効果があることは知られている。旧約聖書に「煙の中の皮袋」とあるように、ユダヤでは古くから燻煙鞣しが行われており、またアメリカやカナダの先住民族も脳漿鞣しと燻煙鞣しを行っていた。燻しただけでは薄茶色

あるいは柑子（みかん）色なので、さらに染色して黒くした。種々の染革は鹿の白革を植物染料で染めたものであり、紫草の根の紫革、茜の緋革、櫛^{はぜ}の黄革、藍の青革等がある。

馬皮は脱毛・裏打ちをしてから油を振りかけ踏み揉んで鞣した。「延喜式」には、革を作る料は油1合、塩3合、糟3升とあり、染料は酢3合、漆3勺、炭5升とある¹⁾。

4. 皮革製品

毛皮や皮革の衣服としての利用は防寒用や身体保護用に太古より始まり、「日本書紀」には、麋鹿^{おおしか}が海から来たが、よく見ると角のある鹿の皮を身に着けていたとか、雨よけの雨衣（後に雨皮と称す）は皮で作るとある。毛皮が後にはステイタスシンボル（身分を表す象徴）ともなり、貂^{かわごも}の裘は身分の高い者しか着用が許されなかった。5世紀中頃の出土品に革帯に取り付けられた飾り金具がある³⁾。中国の内モンゴルや朝鮮の楽浪の遺跡からも同様の金具類が出土している。日本では603年に官位の制ができ、礼服の装束として革帯が使用された。正倉院の幾つかの革帯は小動物あるいは馬の革と推定されるが、それらに金銅製や紺玉（ラピスラズリ）製の鈿^か（飾り）が取り付けられてある⁴⁾。なお阿須賀神社（熊野）の石帯^{いしのおび}は室町時代の作とされ、牛革と思われるものに黒漆が塗ってある。

縄文時代後期の遺跡から長杓形の土器が出土し、また古墳時代（3世紀末～7世紀末）の人物埴輪も長杓や短杓をはいており、これらは皮を縫い綴じた杓と思われる³⁾。奈良時代には、鳥^{せきのくつ}・履^り・靴^{かのかい}・鞋等の履物が中国から伝来し、衣服令にも定められた。鳥は革製の二重底で、履より格式の高い礼装用であり、鳥皮履^{くりかわのかい}と称した。靴は足首の長いものであり、鞋は底が革で縁が革また

は布帛であった。「延喜式」では、貢納された牛皮は履用と明記されており、内蔵寮で牛革や皺皮革（銀面が蝦蟇のようにぶつぶつしているもので、皺革とも言う）に製造され、履の材料となった。正倉院には、爪先が反り上がった赤い納御礼履や黒い履、錦の貼った錦履がある⁴⁾。いずれも牛革製であるが、前二者の内張りは鹿革である。

藤ノ木古墳（奈良）の馬の埴輪には、尻の部分の装飾金具に革帯が付着しており、また鐙を吊るす力革に取り付けられていたと考えられる鉸具が見つかっている³⁾。鞍は古くは革製であったが、中国では三国・南北朝時代以降に木製の鞍が流行し、日本にも古墳時代に輸入され、日本でも作られた。正倉院の鞍は木製の鞍橋に鹿革の鞍褥が敷かれ、さらに鞍橋の下に牛革やアザラシ皮の鞆と鹿革で縁取りをした麻布などの屨脊が取り付けられている⁴⁾。平安時代の鞆には豹や虎、鹿の毛皮が使用された。馬の両側に下げた泥障にも熊や虎、豹の毛皮が用いられた。豹や虎の皮は中国や朝鮮から輸入され、身分の高い者のみを使用した。

狩猟や騎射の時に、足を保護するために穿いた行ばきは古くは布帛製であったが、平安時代以降は毛皮が使用され、初めは熊皮が、後に鹿皮が一般的に使用された。太刀の鞘を保護する尻鞘に、虎や豹、熊、鹿等の毛皮が使用された。京都の時代祭りでのやぶさめ列（鎌倉時代）の武士は鹿皮の行ばきを穿き、虎皮の尻鞘をはめた太刀を腰に差している。平安時代の豪族の様子を記述した「宇津保物語」には、豹皮の尻鞘の太刀を佩くとか蒔絵の鞍橋に豹皮の鞍覆をつけるという記述がある。弓矢を入れて携帯する容器に、矢筒式の鞆と矢立式の胡禄があり、矢を束ねる紐、それを背負う帯に革が使用された。なお正倉院の胡禄の緒は鹿革である⁴⁾。矢を射るときに手を保護

する鞆は牛または馬の革であり、手と緒にそれぞれ牛と鹿の革が使用されている。聖武天皇ゆかりの品を記した「東大寺献物帳」には、太刀の帶執（鞘の金具と腰に付ける緒をつなぐ緒）と懸（把に付いている緒）が紫皮や黒皮、白皮、洗皮と記されている。これらの皮は鹿革であり¹⁾、弓や胡禄、鞆、甲、屏風等にも記されている。

古墳出土の甲冑には鉄板をはぎ合せた短甲と板金を短冊形に裁断した小札を糸もしくは革で緘威した挂甲（かけよろい）があり、また埴輪の中には革製と推察できる甲冑を着装したものもある³⁾。短甲は4～5世紀前半には鉄板を革紐で綴じ合わせ、5世紀中頃以降、鋌で留めるようになった。天神山古墳（福井）や石山古墳（三重）からは木枠に漆塗りの革を張った痕跡のある盾が出土し、大丸山古墳（山梨）からは鉄製の小札を革紐でつづり合わせた短甲が出土している（国立東京博物館展示）。桜塚古墳群（大阪）からは、完全な革盾や革綴の短甲と冑、革草摺が出土している⁵⁾。最近、茶すり山古墳（兵庫）の兜に鹿の毛が付着していることが判明したが、これは兜内側に鹿革をクッションとして裏張りしたことを示唆する⁶⁾。正倉院の御甲は鉄の小札を鹿革と見られる紐で綴じている⁴⁾。大谷古墳（和歌山）から出土した鉄製小札の馬甲に鹿毛が付着しており、鹿革の紐で札をつなげたと思われる⁷⁾。法隆寺には麻布に金銅製小札を革製と思われる紐で縫い付けた馬甲が保存されている⁸⁾。「続日本紀」（797年完成）によれば、光仁天皇が780年に「甲冑は皆よろしく革を用いるべし」と勅命を出している。また桓武天皇が790年に蝦夷征討のため、坂東諸国に2,000領の革甲を作らせている。「延喜式」には、短甲冑や挂甲の素材として、牛や馬、鹿の革が記され、さらに修理には馬革と洗革を用い

るとある¹⁾。現存する鎧の最古の遺品とされる大山祇神社（愛媛）の沢瀉威鎧は奈良時代の手法を伝えた平安時代の作で、小札がすべて革であり、綿糸で威してある。平安中期頃から大形の大鎧が騎射戦に有効なので普及した。これには革の小札が用いられ、中には鉄札を交えたものもあった。革札は牛の練革（煉革）であったが、後世は馬の革も用いたようである。札を横にからむ革紐（綴革）には牛革や馬革を用い、その札板を上下につなぐ（威す）のには鹿革を用いた。甲冑に使用される革所には、兜の裏張や吹返、胴の弦走や肩、蝙蝠付、袖の裏および金具廻等がある。弦走韋は弓弦の走りをよくするというような実用性と美しい文様の装飾を兼ねている。絵韋（画革）や緒（紐）にはしなやかで染色性の良い鹿革が用いられた。源平合戦当時の鎧である厳島神社の鎧は大型の黒漆塗革小札を小桜韋で威してある（図1 神社発行絵葉書）。

最近（2011.5）、十三湊周辺遺跡（青森）で、8世紀頃の製造と見られる銅板製の押出仏が確認されたと報道された。それには



図1 小桜韋黄返威鎧
(平安時代 厳島神社蔵)

腰鼓（くれつづみ）を打つ姿が浮彫りにされていた。腰鼓は腰に下げ、両手で打つもので、7世紀に中国より鞞鼓と共に伝わった。腰鼓は現在絶えているが、漆鼓や磁鼓の胴が正倉院に残っている。胴の部分が少し膨らんだ鞞鼓は雅楽器として今日に至っている。雅楽には種々の鼓や太鼓が使用されたが、だ太鼓は火炎装飾の枠に吊られた皮面の径が2メートルほどの大きさである。なお春日大社のものは鎌倉時代の作である。雅楽は5～6世紀に中国や朝鮮から伝来した舞楽が日本古来のものと融合し、平安時代に宮廷や社寺で荘厳な音楽として栄えた。音曲と並んで遊戯として蹴鞠があるが、その鞠は鹿革製であり、それを革沓で蹴った（筆者2005.11 談山神社で検分）。

三ツ塚古墳（奈良）から7世紀末から8世紀初頭の金銅製金具付のバッグ形の革袋（ポシェット様）が出土したが（2002.1）、実際は革の部分が消失しており、表面に塗られた黒漆が残り原形を留めていた。正倉院の幾つかの漆皮箱は牛皮と猪皮と判断されている⁴⁾。「延喜式」では、革篋には牛と馬、鹿の皮を使用すると記されている。

東寺や唐招提寺に仏堂を飾る牛皮華鬘があるが、これは牛皮を裁断して蝶や鳥、花



図2 牛皮華鬘
(平安時代 東寺伝来 奈良国立博物館蔵)

の文様を透彫りし、漆塗りをして顔料で彩色したものである(図2)⁵⁾。唐招提寺のものは現存中では最大で、107×83cmほどである。華蔓はもともとインドで貴人に捧げる生花の花輪であったが、後に供花を意味するようになり、革や金属、木などで代用された。

古代の鞆^{かぶと}については、「日本書紀」では鹿皮で作り、「延喜式」では牛皮で作るとあり、江戸時代の「和漢三才図会」では、鞆は吹韋なり、狸の皮が上とある。韋の字から、鹿皮が主に使用されていたと思われる。

5. まとめ

奈良・平安時代において、皮革や毛皮は貢納物であり、それらを用いて衣類、履物、武具、馬具、皮袋や皮箱、紐や帯、太鼓や鼓その他いろいろな皮革製品が製作されていた。

文 献

- 1) 竹之内一昭：延喜式から読み取れる古代の皮革，皮革科学，54，111（2008）。
- 2) 松井章：古代日本の皮革製作技法，民博通信，35，22（1987）。
- 3) 千賀久：古墳時代の革製品，皮革科学，50，129（2004）。
- 4) 出口公長，竹之内一昭，奥村章，小澤正美：正倉院紀要，28，1（2006）。
- 5) 金子賢治：日本の美術 342 革工芸，至文堂（1994）P. 21, 38.
- 6) 井上美智子 奥村章：豎矧板鋌留衝角付冑の布と獣毛様付着物の同定，兵庫県文化財調査報告，383，史跡茶すり山古墳，兵庫県教育委員会，92（2010）。
- 7) 木川りか：大谷古墳出土馬甲に付着した毛皮の獣毛の形態およびDNA分析による生物種調査，和歌山市立博物館研究紀要，14，24（1999）。

- 8) 国立東京博物館 法隆寺等編：国宝法隆寺展，No.112，NHK（1994）。